【郷土史への扉】

栄之尾温泉の一夜

NHK大河ドラマ「篤姫」の放映で鹿児島が大いに注目を集めています。「篤姫」の始まりのころ、青年時代の篤姫ともう一人、青年の武士が登場していました。この二人は幼馴染のごとく、親しく付き合っていました。この若い武士は肝付尚五郎という名前でした。

肝付尚五郎は後に薩摩藩家老となった小松帯刀です。小松は喜入の領主であった肝付兼善の三男で、天保六年（一八三五）の生まれ。二十二歳の時、日置郡吉利の領主、小松清猷に養子に出たので、小松の姓を名乗りました。

ドラマの主人公篤姫と関係した場所などは霧島市には無いようです。ところが篤姫と友達のように描かれている小松帯刀については、足跡が残っています。

時は幕末の慶応二年（一八六六）三月、小松は霧島の栄之尾温泉に湯治に来ています。県立図書館刊行の『小松帯刀日記』（県資料集第22）によってその内容を知ることができます。また『小松帯刀傳』（県資料集第21）では小松の一生を窺い知ることができます。

その全容を紹介できないので、ここでは日記を追って一部抜粋してみましょう。

三月十四日　晴　八ツ過鹿府より出船七ツ時分国府浜之市へ着船　一泊

三月十五日　晴　五ツ頃浜之市出発横瀬にて昼仕廻　八ツ過温泉場へ着　直ニ入湯二度

弥生十六日　晴　早朝本陣湯　それより硫黄湯へ両度　都合三度入湯

同　十七日　晴　朝本陣湯　四ツ過打込　夕刻硫黄湯へ入湯也

四月八日鹿児島城下に帰るまで、朝は本陣湯、夕方は硫黄湯と一日ほぼ二回小松は温泉に入っています。実に日課のごとく決まった温泉で湯治をこなしているのです。「本陣湯」とは、栄之尾温泉の一部を構成している湯のようです。

小松という人は几帳面な性格のようで、湯入りの順序をあまり変えていません。

湯治に来た頃の小松の動静は、『小松帯刀傳』によると次のようになります。

慶応二年正月十八日　京都ノ宿所御花園ニテ長藩木戸孝允、薩藩島津伊勢、桂久武、西郷隆盛、大久保利通、吉井友實、奈良原繁等ト会合シ、薩長聯合ノ事ヲ談合ス

同　二月廿九（二九）日　桂、西郷、吉井、土藩ノ坂本龍馬并ニ其妻及ビ長藩三好慎蔵等ト京師ヲ発シ帰国ノ途ニ就キ、三月四日三邦丸ニテ大坂出帆、三好ハ長府ニ帰リ坂本ハ共ニ薩摩ニ赴キ、八日長崎ニ着シ、十日帰着ス。

小松の温泉行きは薩長聯合（同盟）の盟約が成立し、京都から帰藩したすぐ後に行なわれたことが知られます。

その前の文久二年十二月に小松は家老に就任しています。幕末激動の時世、当然公務多忙な身です。それを三週間余りも山にこもって湯治三昧の毎日。やはりこれは周りが小松の身体を気遣って温泉行きを勧めたためではないでしょうか。

もっとも小松の身辺には湯治期間中、二十四、五人の人が出入りしているのが日記に記録されています。天下の形勢や鹿児島城内の出来事などの情報は、これらの人々から逐一小松の元にもたらされたものと思われます。

小松の元を訪れた人物で特に目に付くのが、坂本龍馬です。三月廿八日の日記に「吉井幸輔（友實）　坂本龍馬　塩浸より見舞として入来之事」とあります。

ここだけ見ると、おやおや天下の志士坂本龍馬が何で霧島の温泉などに来たの、と不思議に思われるでしょう。ところが『小松帯刀傳』の記事を読めば、小松と龍馬の係わりが深いことがよく分ります。さらに龍馬は一月二十四日、京都の寺田屋で幕府の役人に襲われて手を傷つけていたということを知ったならば次の言葉が意味を帯びてくるでしょう。

「吉井もとふとふ（同道）にて船中ものがたりもありしより又温泉にともにあそばんとて吉井がさそいにてまた両りつれにて霧島山の方へ行」（龍馬が鹿児島から姉の乙女に出した手紙の一節）

龍馬とおりょうの温泉行きや高千穂登山は、始めから吉井などの周旋によるもので、三邦丸で薩摩に来る時から計画されていたもののようです。

従って大坂から同船した龍馬夫妻を自分の別邸に寄宿させた小松は、当然手のケガの温泉治療を兼ねて龍馬が霧島の温泉に来ることを知っていたのです。

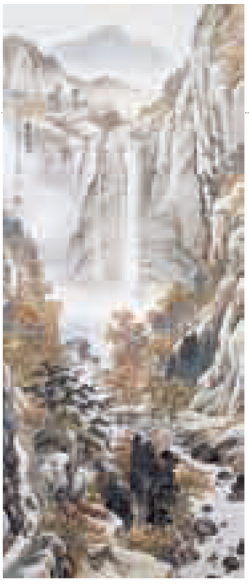
廿八日には龍馬たちは小松の元を訪れ、ともに栄之尾温泉に泊まっています。

栄之尾温泉の一夜、明治維新の礎を築いた小松と龍馬は、温泉に浸かりながらどんな話を語ったものか。大政奉還か王政復古のことだったでしょうか。

都城市立美術館に山内多門という画家が描いた「霧谿晩秋」という作品があり、これは犬飼滝を書いたものとか。（写真）

「霧谿晩秋」には左下から上へと一筋の山道が画かれ、そこを馬に乗った人物と徒歩の人物二人が上って行く様が描き加えてあります。龍馬や小松などが旅したのは、こんな情景だっただろうなと思うとほほえましい気分に誘われます。

文責＝藤



山内多門の「霧谿晩秋」（都城市立美術館蔵）